

## 論 文 の 要 約

報告番号	<span style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 2px;">甲</span> 第 23 号 乙	氏名	蔡 梅花
学位論文題目	連体修飾句の形容詞的用法について		

論文の要約

本論文は、日本語の形容詞的用法について、形容詞的用法の研究のなかで最大の問題と思われる、1)『形容詞的用法はテンス・アスペクトの意味を表さない』ということと、2)『形容詞的用法は「タ」形が自然であり、「タ」形と「テイル」形に意味の違いはない』という、形容詞的用法の定義と形式・意味に存在する2つの問題点の解明を目指したものである。

本論文の第1章では、いわゆる形容詞的用法の定義の問題点を取り上げられ、第2章では、テンス・アスペクトの研究史と形容詞的用法に関する研究が述べられ、そこから見えてきた問題点を取り上げられている。この2つの問題点の解明が第3章から第6章まで考察されている。

本論文では、形容詞的用法の定義に存在する問題の解明を目指して、先ず、新たな形容詞的用法の定義の規定をした。新たな定義は、『形容詞的用法は、連体修飾節の「タ」形と「テイル」形が表す事柄が、事物の性質・状態を表す用法である。』というものである。

このように考えると、形容詞的用法には、「テンス・アスペクトの意味を表さないもの」と、「擬似的にテンス・アスペクトの意味を表すもの」が含まれることになる。前者を「単純状態」の形容詞的用法（聳えた／ている山）と名付け、後者を「擬似状態」の形容詞的用法（割れた／ている皿）と名付けた。

「単純状態」と「擬似状態」の形容詞的用法については、どのような特徴を持っている動詞が形容詞的用法に現れやすいのか、という問題をめぐって、〈他動性〉の観点から統一的に説明できることが論じられている。

新たに設けた「擬似状態」の形容詞的用法については、「タ」形が「完了」の意味を、「テイル」形が「結果残存」の意味を介して状態を表す場合に、「擬似状態」の形容詞的用法になれること、また、「擬似状態」の形容詞的用法になれる動詞は〈他動性が低い〉特徴以外に〈限界性がある〉特徴を持っていること、それからこの特徴が形容詞的用法の形式にどのように関わっているかが論じられている。

本論文では、形式と意味に存在する問題の解明を目指して、次は、「タ」形と「テイル」形に多い形態的特徴と形容詞的用法の形式が、被修飾名詞の性質に関係していることを指摘した。これは、今まで研究されていないもので、形容詞的用法の「タ」形と「テイル」形がどのように選択されるかという難問の解明にわずかな貢献ができたのではないかと思われる。

以上のように、本論文では形容詞的用法を分類し、形容詞的用法に現れやすい動詞の特徴を見出し、「擬似状態」の形容詞的用法が表す擬似的アスペクトの意味と被修飾名詞の性質から形容詞的用法の形式が選択されることを明らかにすることで、今まで形容詞的用法の定義と形式・意味に存在する諸問題の解明に至っている。